

批評・紹介

支那政治史(下)

「支那地理歴史大系」第五編

昭和十六年七月、白揚社發行

四六判五四九頁、定價參圓

前號をうけて支那政治史(下)をとりあげる事となつたが、本編に筆を執つた方々は、いづれも同じ學窓の先輩であり畏友であるため、正直なところ、これはいはゞ、もつとも救ひにくい。しかし本誌の批評紹介に對する建前や當初の精神を思ふときは、かうした私の情誼などは超克しなければならぬであらう。

だから以下自分が申上げるのも、各著者に對し或は無理な注文や酷評にすぎたところが多々あつて、禮を失したかも知れないが、この點まへもつて深くお詫びしておく次第である。

政治史の概念やそれに對する注文めいたものは、すでに前號の本編上卷の批評において、内藤戊申氏が述べてゐられるやうであるから、こゝでは直ちに各章に

ついてみてみることをする。

さて本編は前編につゞいて、北宋以後現在までを、北宋・南宋・遼金・元・明清・民國の七時代政治史に分ち、七人の執筆者がそれぞれ分擔されてゐる。

第一章北宋政治史(曾我部靜雄)

複雑多岐な北宋の政治經濟組織が、三四七ページといふ僅少な紙丁のうちに、要領よく壓縮されてはゐるが、文と文との區切に際して少しも行が改まらず、ぶつづけに書かれてゐるので、一般讀者には大變よみづらい。

第一節 君主權の確立の條では宋の建國精神を中心に、近世史の特色について述べてあり、色々教へられるところが多い。

第二節政治機關では、宋の上部組織と下部組織およびそれらの組織そのものが時間的に推移改變されてゆく經緯を、平明にしるしてあり、第三節は、政黨政治といふ近代的な言葉で、北宋の黨爭(朋黨)を表現し、これを中心にして政治史を述べてゐるのだが、もし第二節と第三節とが、入れかはつてゐたら、さらに解りよくはなかつたらうか。さすれば第二

節で、しきりに出てくる王安石前後の政治・經濟組織變革の意義も、讀者には一層明確になつてくるやうに思はれる。

第二章南宋政治史(宮崎市定)

一 體、南宋の政治史は北宋のそれが、王安石と司馬光を中心とする明黨の對立を主流として進展してゆくのに對し、秦檜・韓侂胄・史彌遠・賈似道を主役とする金および蒙古との外交政策と密接に結びつたがつて、その政治史は北宋に比べるともつと、複雑怪奇化してくるやうに思はれる。

かやうな錯節した難解な南宋政治史を肩のこらない平易流暢な文章で、ときに氏一流の諧謔さへまじへて、讀者を知らず知らずのうちに、南宋の滅亡にまで引きずつてゆく著者の手際は、たうてい他の追隨をゆるさない。

しかし強ひていへば、宋・金の關係が比較的詳述されてゐるのに對して、南宋と蒙古との關係が、あまりに簡略すぎるやうに思はれる。やはり、史彌遠・賈似道についても、もう少し書いてほしい氣がする。後の第四章の元代政治史が、簡

單にすぎることを思へば、なほさらに、その感が深い。さいはひ、これについては同じ著者の「賈似道略傳」(本誌第六卷第三號所載)などがあるから、讀者はついて見られたらよからう。

第三章遼金政治史(外山軍治)

本章では、金代史特に金と宋との外交史にもつとも精力が集注されてゐるやうに見えるが、そのためか、前章の南宋政治史と、しばしば叙述が重複した傾きがある。ともあれ、北宋政治史にしても、南宋および遼金政治史にしても、いづれも、もつともよく時代的性格を理解し、且つ手なれた人々によつて、平明に書きあげられてゐることは、この時代における政治史研究の水準を、一段と引きあげたものと稱しても、決して過當ではない。

手輕に書かれてはゐるが、その手輕さになるまでには、各著者の永い年月にわたる、なみなみならぬ研鑽と、自らの手になる幾多の論文があることを忘れてはならない。

なほ、本章のところどころに圖版のほか、簡単な世系表をも挿し添へてゐるのは、大變便利であつて、著者の細かい點

にまでゆきおよび利他的な心遣ひは、感謝されてよい。

第四章元代政治史(有高巖)

普通の概説風な書きかたをさけて、總説的に書かれてゐるから、これによつて元代政治史の概論的知識を得ようとする人には不向きであるといはざるを得ない。だから、先行する南宋史や遼金史および、つゞく明代史とのむすびつきが、しつくりせず、讀者をして混乱に陥らしめるおそれが多分にある。しかし、元代史の最高峰たる著者の卓見は、各節毎にあらはれてゐて、概説以上のものを求めようとするものには、示唆する點が多々あることを強調しておきたい。

第五章明代政治史(龔淵一)

讀んでみてまづ氣のつくことは、むらのない細心な書きぶりに大變好感がもたれる。續刊の周邊史も、明代の部が著者の筆になるといへば、明代史に關するかぎり内外ともに、まとまりのよいものとなることを期待しうる。

たゞ難をいへば、むらのなさといふ反面、平面的叙述に流れすぎてはゐないだらうか。またあまり政權の推移、内廷の

動靜のみに氣を奪はれた傾きはなかつたらうか。邊防に關聯して、中央の主題となる銀および鹽の問題、或は一條鞭法を中心とする税制改革問題などは、むしろ明代の政治的動きを、さらにゆすぶる大きな波動であることを指摘しておいてはしかつた。

また外族との關係も、北虜(滿洲・蒙古)のみに止まつて、それと並稱される所謂南倭について觸れてないのは淋しいそれで思ひ出したが、わが日本との關係も、たとひ「支那政治史」とはいひ條、明代が一番交渉の深かつたことであるから、これについて一應述べて置いてもらひたかつた。もつとも秀吉の朝鮮征伐については一言してあるが。この點、宋代史についても同様のことがいへよう。

第六章清朝政治史(浦廉一)

こゝでは清代が、大體初世・盛世および内亂外患による衰亡時代の三つに大きく區切られ、そのうち中期乾隆頃までは、清朝の支那文化に對する態度、漢人の統禦策などにもつとも力を入れ、中期以後になるとその重點を諸外國との關係に求めて清朝政治史を語つてある。

本章には、各節末に根本資料をはじめ主なる参考著書はもとより、わが國人のものは論文に至るまで周到に掲げてあるが、讀者には大變有難く感じられることと思ふ。なほ、それらについて多少氣づいたことを蛇足しておかう。

第一節に、明實錄として成祖・宣宗・神宗・熹宗とならんで毅宗（崇禎帝）があつてあるが、毅宗には實錄と稱するものはなく、たゞ強ひていへば、國權がこれに準ずるものといへるであらうか。また李民賓の柵中日錄・建州見聞錄などがあげられてゐるなら、近年稻葉博士などによつて紹介された申忠一の建州圖錄、それを解説した建國大學刊「舊老城」などもあげてほしかつた。ついでに、滿洲歴史地理第二巻も。

第三・四節では清季外交史料や八朝條約、などもあつてよく、それから、これは著者の失念だとは思ふが、嘯亭雜錄・驚曝雜記の名も見當らなかつたやうに思ふ。

第七章民國政治史（小竹文夫） これまで出てゐるこの種の叢書風の概説書は、清末までは比較的详细に書かれてゐる

ても、現代支那史になると、おざなりのものを附録的に、つけ足してゐるのが多いやうに見うけられるのに對して、本書はこの部分に百ページにあまる紙數をさいてゐる。

特に著者は、多年上海の現地にあつて支那における眼まぐるしい政治的變轉を直接體驗し、現になほされつゝある、人であり、本章において、その現代支那史に對する、たゆまない研究が、それらの深い體驗に生かされつゝ叙述されてゐることは、文字どほり本編の挿尾をかざるものといへよう。なほ讀者は、同じ著者の手になる本大系中の「民國社會史」及び「現代支那史」（教養文庫）をも併せ讀まれるならば、さらにうるところが多いことを附記しておく。

さて以上、本書を通覽してみると、その傾向に政治的推移を概説風に、順序立つて叙述されたものと、總説的に書かれたものとの二とほりあることが目立つ。

後者は、通史的・概説的な豫備知識をもつた讀者には大變興味があり、示唆に富んではあるが、それ故にまた、本大系のやうな「新しく支那研究に着手せんと

する人々への無二の入門書」たらしめんことをも、その建前とするものには、不向きの誹りをまぬがれぬであらう。

また各時代々々を、數多くの人々によつて執筆されるものとしては、著者それぞれの新見解を吐露することもよからうが、たとひ月並みではあつても、一般讀者の立場をも考慮して、ゆきとどいた書きかた——かといつて、時代性格を把握してゐない、寄木細工的な繁冗さといふのでは決してないが——をして戴く方が、より望ましいのではないかと思ふ。

（田村實造）

支那佛教經濟史研究

の二三に就いて

一、序

支那佛教經濟史には二つの性格が認められる。一は佛教史的の性格であり他は經濟史的の性格である。然してその夫々に從つて佛教文化史の一部門として、又特殊經濟史の一部門として研究されてゐる。こゝに注意すべきは、この二性格が、こ